

2013年2月4日

- 派遣者** 佐藤慶子（京都大学大学院アジアアフリカ地域研究研究科
グローバル地域研究専攻・研修員）
- 派遣先** 1) ロンドン大学東洋アフリカ研究学院（SOAS）、イギリス国ロンドン市、
ケルン大学、ドイツ国ケルン市
2) ロンドン大学東洋アフリカ研究学院（SOAS）、イギリス国ロンドン市、
インド国タミルナードゥ州チェンナイ市、マドゥライ市
- 派遣期間** 1) 2012年7月4日～9月8日（67日間）
2) 2012年10月17日～2013年3月22日（157日間）

1. 派遣の目的

本派遣の目的は、次の3つである。1) 歴史的にインドと繋がり深いイギリス・ロンドンにおいて、地域研究の方法論と、南インドを対象とするインド農村社会に関して蓄積された文献や記録を調べる事、2) 英語メディアによる研究の発信力を、論文作成、学会での口頭発表、セミナーでのディスカッションの方法を実地で行うことにより向上させる事、3) インドに赴き農村調査を行う事、である。

2. 派遣の概要

派遣者は、1) については、ロンドン市内はもとよりイギリス国内に点在する博物館、寺院、大学図書館など、英領インドと宗主国家イギリスとの経済的社会的な靱帯を随所で垣間見ることが出来た。またロンドン大学・東洋アフリカ研究学院（SOAS）図書館では、明治～昭和初期の日本の農村社会の構造変化を記した書籍を多数見つけることが出来、それらから博論として取り組んでいるインドの農村社会の構造変化を考察する際のヒントが得られた。大英図書館では、これまで見つけられなかったインドの調査地・マドライ地域に関する歴史書を発見出来た。また SOAS 以外にも、至近距離に点在するロンドン大学系列の他の大学院の図書館（経済系大学院の LSE や教育学大学院の IOE）で入館証を作成出来たので、気分を変えながら夜 12 時まで図書館を梯子して勉強した。

2) については、まず SOAS で 6 週間のサマープログラムに参加し、英語論文作成ゼミと国際関係論ゼミを受講した。前者は 3 本の小論文提出、後者は 6 回のチュートリアルとプレゼンテーションによるアウトプット訓練であった。特に後者は、レクチャーで理論を体系的に教わり、セミナーで実際のケースに当てはめながらディスカッションを行うスタイルで、毎回能動的な受講態度が求められるもので気が抜けなかった。授業は知的好奇心が十分に刺激されるものであった。クラスメイトと仲良くなれたのも良かった点である。

次に 8 月末には、ケルン大学にて国際地理学会第 32 回大会に参加した。発表セッション

には、開発学によるフィールド調査の発表なども混在しており、領域横断的で、質問のレベルがファクトファインディングに終始しているように思えた。また日本からも120人以上の研究者が参加登録しており、日本の他大学の方々と食事会などの交流や、インド研究を専門とする20人以上の参加者たちとの会食なども楽しむ機会があり、有意義な時間を送る事が出来た。

10月から12月にかけては、SOAS 経済学部 科目履修生（アソシエイト・スチューデント）として、インド経済の授業のみ聴講した。授業自体は、毎週レクチャー2時間に加えて、チュートリアルと呼ばれる、学生の主体的な発表で構成される2時間の授業が1学期間に10回程あった（学部生向けでは、博士課程学生のアシスタントが担当する）。派遣者はこれまで、農村でのフィールドワークによる実態調査を積み重ねてきた為、マクロ経済学やミクロ経済学、国際政治経済学（ポリティカル・エコノミー）等の文献調査を中心として、そこで展開される論点を議論の中心に据える方法には、慣れるのにやや時間を要した。

3. 今後の課題

本プログラムへの参加により、背景の異なる様々な年齢の人に出会った。今後は、研究を介して、形式にとらわれることなく、いろんな方と関わりをもちたいと思う。



サマーコースの修了式でクラスメイトと



ケルン大学で行われた国際学会での発表風景

4. 謝辞

本派遣中には次の方々にお世話になりました。京都大学大学院アジアアフリカ地域研究研究科・田辺明生教授、同研究科・頭脳循環プログラム事務局および研究科事務部、ロンドン大学東洋アフリカ研究学院（SOAS）経済学部ディピタ・チャクラバルティ専任講師、首都大学東京・都市環境科学研究科・浅田晴久特別研究員、マルティン・ルター大学ハレ・ヴィッテンベルク大学・青木真衣講師、ロンドン大学・バーベックカレッジ博士課程・稲田貴子氏、ランカスター大学 MBA コース・馬越悠爾氏。記して感謝します。